

早期療育活動における言語表出に遅れが見られる 子どもの事例的考察

武藤 理恵* 都築 繁幸**

I. はじめに

現在、全国各地で障害児の早期療育活動が行われているが、その形態については各地区でそれぞれ特徴が見られるようである。

A市では早期の療育活動に関しては1歳代から保健婦を中心として相談事業が展開され、1歳半健康診断でチェックされ、その後、フォロー的な指導がなされ、必要に応じて週1回の遊び活動のサービスが展開される。更に3歳児健康診断で再チェックされ、必要に応じて集団の療育活動が入園までなされる。療育側は、入園の際は障害児保育の加配がされている園と交渉しながら障害児に応じたサービスが施されるように配慮している。

ここでこの事例を取り上げた事由は、次のようにある。療育側は言語発達の遅れと不器用さが見られたことから学習障害サスペクト児を疑うようになり、行政側による集団療育活動のみならず、B大学障害児教育研究室における個別指導を併行して行なうことを試みた。当初、言語面に特に遅れが見られたので要経過観察児となっていたが、集団活動に参加し始めてから次第に粗暴な態度が見られるようになり、個別指導の必要性を感じ、大学の研究室の治療活動に加えるようにした。その後、短期間にかなり好転し、入園にいたったものである。

現在、幼児段階で言語の遅れ、不器用さ、対人関係の維持が困難であることなどが複合した子ども群が存在しているが、予後を楽観し、特別な配慮をすることなく入学を迎える、結果的に何らかの学習上の問題を示すことが多いようである。本事例をとおして診断は確定しないが、短期間に集団指導と個別指導を行なうなど、可能な限り、援助サービスを行なっていく必要性が示された。そこ

で大学側での個別指導の経過の概要を記述し、若干の考察を加えることにした。

II. 本児の概要

(1) 家族構成と生育歴

父、母、兄、本児の4人家族である。本児と兄の年の差は4歳4ヶ月である。

妊娠中は特に問題は見られなく、出生時は、正常分娩で出生時体重は2502グラムであった。出産直後の状況は特に問題はなかった。

(2) 相談歴

1歳6ヶ月健康診断：ことばの理解力はあるようだが、発語はみられない。母親との問診では、ワンワンはどこ、花はどこなどと問いかけると指をさして答えられない、ママ、ブーブーなどの意味のあることばをいくつか話さない、などの理由から追跡対象児となる。以後、保健婦による相談と週1回の自由な遊びの活動グループに参加するようになる。

2歳2ヶ月：言語面ではカーカア、カンカンのみであった。

2歳4ヶ月：言語面ではカンカン、パンパンのみであった。

2歳6ヶ月：ママというようになった。

2歳7ヶ月：母子関係は良好、対人関係では他児への興味、働き掛けはある。語尾の模倣、反復は出てきている。所見欄にはことばだけの問題かと記載される。

2歳9ヶ月：自発語が少ない、発音が不明瞭、理解力はある。

2歳10ヶ月：週1回、2時間の遊びの教室に参加する。

3歳2ヶ月：遊びの教室に参加してから4ヶ月経過した。呼名やおやつの時の着席は難しかったが、現在はかなり改善してきている。衝動的、攻撃的な面、例えば、他児を押す、ブロックで作っ

* 愛知教育大学大学院教育学研究科

** 愛知教育大学教育学部障害児教育講座

た塔に体当たりする。水遊びや着替えや水に入るなどを強く、拒む。母親は、本児の動きが激しく乱暴なことやことばがあまり出てこないことを心配しているが、問題意識は低い。

3歳3ヶ月：3歳児健康診断をうける。ことばの面においては単語数が増加してきており、要求を単語で伝えたり、2語連鎖もみられる。K式発達検査を実施したところ、課題への取り組みは良くなく、指示を無視して自分本位である。視覚的には情報が入るが面接者のことばによる指示は反応しない。また、興味が移りやすく集中して取り組む時間が短い。模倣構成の積み木に興味をもち、一人で遊ぶ。勝手に組み合わせて「ほのお、ファイア」などと命名している。

排泄は自立しているが、ボタンはめはできない。

遊びの教室で時々見られる突然理由もなく他児に手を出したり押し付けたりすることは家ではみられない。現時点での母親の心配事は、集団行動が苦手なことから次年度より入園してやっていくかどうかであり、入園を躊躇している。

3歳4ヶ月：遊びの教室に参加してから6ヶ月たつが、言語発達遅滞が中核的な問題かどうかはっきり見られない面がある。しかし、入園のことも考え、残り半年間、治療教育的対応が必要ではないか、集団遊びのみならず個別に対応が必要ではないかと思われた。

そこでB大学障害児教育研究室における個別指導を併行して行なうようになった。B大学障害児教育研究室の都築は、A市の集団療育活動のスーパーバイザーを行なっており、行政側のサービスと大学での援助活動と連携を図っていた。

(3) 大学相談室でのインテイク状況

治療教育活動のための大学相談室でのインテイクの状況は次のようである。(セラピストをT、子どもをCとする)

Tが部屋に入ってきて「こんにちは」と言うとCは「おはよう」と答える。Cは、Tと電車や積み木で階段を作っては、たびたびお母さんの方へ走って行って「ねねー、ママ」と話しかける。母親が「階段できた?」と聞くと「かーだん」と繰り返し、次には「ねね、ママ、かーだん(階段)」と母親に話しかける。「ねねー、ふね」(船があつたよ)などの話しかけも見られた。電車のレールが壊れると「こわった」、「コーキ」(飛行機)、「ガンガン」(電車の信号機の音)など音の省略や

置換が見られた。

ことばのテスト絵本を実施した。ことばの理解では、人形や積み木の単語がわからない。空を飛ぶもの、用途を表すことばが理解されなかった。これは囁語理解の中でも「字を書くとき使うもの」、「腰掛けるとき使うもの」、「自分の顔を見るとき使うもの」なども理解していなかった。囁語は聞こえているようだが、単語では語彙不足が目立つ。文章面では、抽象的なことばの理解に乏しいようだ。

津守・稻毛式発達検査では、日常生活の洋服の着脱や靴を履くなどの項目が完全ではなく、特に食事・排泄・生活習慣に遅れが見られた。

言語面では、文章レベルや単語の長さに関係して、構音が不明瞭である。これは、2歳台に話していたジャーゴンの名残のように見える。

全体的に見て言語発達遅滞を呈しているが、現在、本児自身が話す意欲が旺盛であり、母親の模倣拡充によりことばを獲得している光景も見られる。

治療教育活動は、子どもの自立を促しながら、支援者が正確なことばをモデルとして話し、子どもとのやり取りができるような場面設定がよいと思われたので週に1回、1時間、やりとりができるような遊びの場面を設定することにした。

III. 治療の経過

以下、治療経過の概要を示す。

第1期 プレイルームで好きな遊び（第1回～第6回）

第2回 「これなに?」と言って、すべての果物の名前を聞いてきた。果物の名前が、まだはっきりしていない。「バナナください」と言っても「どれ?」と聞き返し、レモンを手渡す。「メロンたべたことある?」と聞くと「おいしーよ。」と答えた。「せんせい、どーれ?」と聞くので「くれるの?」と尋ねると「いいよ。」と言う。入っていた果物をかごの中から全部いっぺんにあけては、また入れることを繰り返す。何度も、お弁当を食べる位置を変える。食べては寝て、「朝ですよー」と言うと、起き、そしてまた食べるというパターンが繰り返された。寝転がっても、目を開けたままで、いびきをかく真似をしている。ぬりえを用意したが、色を分けて塗ることはできない。とりあえず、自分の手に握ったクレヨンでなぐり

描くという感じだった。クレヨンも同じように、全部あけてしまい、また、一本ずつ片付けるということを繰り返した。ビデオカメラに興味を持ち、「これなに?」と聞いてきたので、「ビデオだよ。」と言うと、「カメラ?」と聞いてきた。「家にカメラある?」と聞くと、「いーよ、カメラ」と返事が返ってきた。

第4回 Cから関わろうとするようになってきた。これまで殆どCは一時も目を離すことなくTを見ていたが、今日は、別々のことをやる場面が見られた。Tの視界にCがない時にはCが「こっち、みて。」と声がけするようになった。離れていた時には「こっち、こっち。」とTを呼ぶようになり、Cから関わりを求めてきた。

野球をやる。交互に交代でバッターとピッチャーをやる。一方が投げ、一方が打つ、打てたら勝ち、打たれたら負け、打てなかったら負け、というようにCなりのルールがあった。Tが投げ、Cが打つことができると「あんくん、かちー。」と言って大喜びをする。「先生はー?」と聞くと「せんせい、まけー。」と言う。Cが負けると「あんくん、まけー。」と自分で悲しそうな声を出す。

果物でお弁当ごっこをする。お弁当を食べて、野球をする。そしてまた、お弁当にする。時々、眠ったりする。これがパターン化する。

プレイルーム内にある木の床の上に立って飛び跳ねる。そのとき立つ大きな音を楽しみながら何度も飛び跳ねる。

うまく疑問文が作ることができない。正確な文ではないが、二語文、三語文で、何とか伝えたいことは分かる。

第5回 絵カードを使用する。正解がえられたものは、「ブランコ、椅子、靴、帽子、りんご、亀、バナナ、みかん、サイ、ゾウ、飛行機」であったが、これらは、すべて正しく発音されたわけではない。「いしゅ、ほーし、かめさん、ぞーさん、ひこーき」とCは言っている。また、絵を見てコーラは「しゅわしゅわ」、手袋は「ぱっ」といいながら、手を広げたり、爪切りは、つめのところで「ちょっきん、ちょっきん」と言いながらきる真似をしている。誤答ではあるが、シマウマをキリン、バスを電車とカテゴリー内で答えている。

果物を使い、お弁当ごっこをした。かごを持つ

ていき「ここ、べんとー、いい?」と聞きながら、場所を決めて座った。「先生はどこにすわっていいの?」と尋ねると「ここ、いいよー。」といって指差し、Tが座ると「せんせい、どーれ?」と聞いてきた。「いちご」と言ったが、どれがイチゴかよくわからなかつたようだ。包丁を「ちょっきん」と言う。半分に切った果物をTにてくれる。果物を食べる真似をして「おーしー。」、レモンは「まじー。」と言う。お弁当を食べる位置を変えていくが、Tに「いこー」といって誘ってから行く。言葉は、不明瞭だが、Tに話し掛けてくる。

ドラえもんのダーツを見つけ「これ、やろう。」という。これまで「これ、これ。」と言って差し出すだけであった。「みたよー。」と言って、テレビで「ドラえもん」を見たことを伝えてきた。TがCにドラえもんの歌を歌うように頼むと「せんせー(うたって)。」と言って恥ずかしがって歌わなかつた。CがTにダーツを投げてほしいと頼む時には「あんくんにも、ポイやって。」と言う。

プレイ中にCが知らないKさんがプレイルームに入ってきた。するとすぐに「どいてよー」と言う。Kさんが出ていった後、「バカな人。」という。バカという言葉をよく使う。

第6回 心の理論の課題を行なうためにMさんも加わった。しかし、Cは、Mさんを見た瞬間、「どいてー」と怒った。その後、ずっと「ばか」、「あっちいけ」、「こっちこっちいけ」、「あっちいけ、ここドア」、「おばさんひと」、「みーんなばか」、「はたくよー」とMさんがCの視界に入るたび怒っていた。また、Mさんを押すこともあった。Mさんだけでなく心の理論の課題の人形を見て怖がって嫌がっていた。これがきっかけで今日は遊んでいても「あんくん、おうち、かえる」と言って何度も帰ろうとした。Tが「まだ行けないよ。」と言っても「いくー」と言う。Tが「先生と遊ぼうよー」と言うとCは「あそんでなんかあげないよ」と言う。

絵カードを行つた。ねずみを見て犬と答えた。犬は「犬」だった。サルを見せると「さる、ひっかく、ちく」、たぬきは「たき」と言って、「ぬ」が抜けていた。にわとりは、「とりしゃん」だった。最初は、答えていたが、そのうち知らない」と答えるだけとなつた。

第Ⅱ期 やりとりのできるおもちゃに限定した中の遊び（第7回～第10回）

第7回 絵カードでは野菜の名前はほとんどわからない。Tが「これなーに？」と聞くとCは「あんくん知らない」と言うようになった。以前では、聞いても分からぬときは、「えっ？ なに？」と聞き直していた。台所用品のコップとポットを使って遊んだ。2つあるのでCは両方に入れてくれ、Tに「せんせい、どうぞ」といってコップを渡してくれる。そしてTがすぐに飲もうとすると「あちーよ」と言う。Tが「やけどしちゃう？」と聞くと「うん、そう」と答えた。Tが「やけどしちゃった」と言うと「大丈夫？」と聞き返す場面も見られた。

少しづつ自分の家の様子をTに話すようになった。今日は、ゲームを家でやったという話だった。「お兄ちゃんとやったの？」と聞くと「あんくん、ひとり」と言う。ゲームの内容を話していくようだったが、はっきりしなかった。Tが分からぬところを聞き返すとCにはそのことがわかるらしく、違っていると教えてくれた。合っていると「うん、そうよ」と言う。

第8回 紙芝居「3びきのこぶた」の中でお母さんぶたが子ぶたの名前を呼ぶ場面でTがCに「Cの名前」と呼ぶと「はーい。」と返事できた。かくれんぼを行なった。Cが鬼をやった。しかし、数の数え方がでたらめで最後には必ず「0」がくる。ルールを知らないのか、鬼をやるのが好きなのか、Cがずっと鬼をやっていた。

前回と同じように買い物ごっこをした。前回は、買い物に出掛ける時、「バイバーイ」と言うだけであったが、「買ってくるー」と言って買い物に出掛けようになってしまった。「なにほしい？」とTに聞くので、Tがあれこれ欲しいものを頼むとちゃんとリクエスト通りに買ってきてくれる。帰ってくると必ず「おかげり」と言う。「ただいま」とは言えない。

第9回 今日は、終始落ち着きがなかった。チョークを使って黒板に落書きをした。今までに1度も黒板に興味を示したことはなかった。黒板消しを使って、机にたたきつけてチョークの粉がつくのを楽しんだり、なぐり描きをして、蛇を描いたりした。楽しそうにプレイルームのブラインドを

上げたり、下げるたりした。机の上に乗ったりもしたが、机がゆれて怖かったようすぐに降りたがった。かくれんぼをしたが、かくれんぼのルールではなく「先生が、鬼やるー？」とTがCに聞くと「あんくん、おにー」と言う。Cがずっと鬼をやった。数は、やはりでたらめで順番に数えることができない。見つけたときは、本当に楽しそうだった。

Cは、いつもダッフルコートを着てくる。Tが「コート着て」、「コート脱いで」とCに言うとCはTに「コート」を「ジャンパー」と言い直させる。

第10回 「絶対」という言葉を家で覚えてきた。前回からTはCに靴を並べることを教えている。たいていCは靴を脱ぎ散らかしているのでTの靴を見本にして靴を揃えさせている。今日も靴を脱ぎ散らかし早速、棚（おもちゃが片付けてある）に向かって行こうとした。そこでTがCを止めて靴を直させようと「先生と同じようにして」と言うと「ぜったい、やらない。」という返答であった。他にもCに嫌なことがあると「ぜったい、やらない」、「ぜったい、やだ。」と言う場面が何度もあった。

果物の名前は、覚えたようだが、まだ野菜の名前が覚えていない。にんじんと大根を反対に覚えていた。その場で正しいことを教えるとすぐに理解し、もう一度聞くと教えたようにきちんと正しい答えがかえってくる。しかし、一週間後、正しい答えが返ってくるかは定かではない。紙芝居で影絵を見せて「これなあに？」と聞くとりんごとぶどうは正解だったが、トマトの影絵や絵でもトマトは「りんご」と答えた。外を見て急に「あんくん、うち」と言い出す。校舎にかかっている時計を見たのかもしれない。いつも2時半に帰るが、今日は、2時23分頃に外を見て、「もうじかん、あんくん、かえる」と言い出した。

第Ⅲ期 お客様とお店屋さんがいる買い物ごっこ（第11回～第13回）

第11回 紙芝居「くださいな」を見る。話の内容は、果物屋さんのところにいろいろな動物たちが買い物にくるというものである。紙芝居と同時に内容に合わせて動物がほしがった果物をCに選ばせた。果物がたくさんある中から一つのものを探

し出すことは難しかったようだ。りんごは、自分で探し出すことができなかつたが、絵を見ればそれが何かを言うことができた。切つた状態のスイカはわかるが、元の丸い状態のスイカはわからなかつた。

紙芝居の後、Cが紙芝居と同じように果物屋さんになつた。これまで二人とも同じ家にいてCが誰もいなゐお店に行って買い物をするという設定だったが、今日は、Cが果物屋さんになつた。お金のことはまだわからない。「りんごと桃ください」と言うとりんごと桃を手渡してくれた。このやり取りが続く。その後、Cはスープを作ってくれた。そしてTの家まで持つてきてくれた。その時、Cなりに空想のドアを作つてノックして「あけてください」と言う。Tが「どうしたの?」と聞くと「スープ、つくつたよ」といつて中に入つてきて2つあるコップにそれぞれついでくれた。この遊びの中では「夜」の設定もみられた。「夜」と言ってその時、Cは寝たふりをしている。Tが「あさですよー。」と言うとまだ眠そうなふりをして「あーあ」などと言いながら起きる。

第12回 セラピー室がある校舎に入ると掃除をしている人が5人くらいいた。Cはびっくりしたようで、いつもはうれしそうに母親と一緒に歩いてくるが、今日は、嫌がつていたようだ。Cは車の中で寝たらしいが、おそらく知らない人がいたので機嫌が悪かったのだろう。近くにいたおばさんを「おばさん。」と怒るように言つてゐた。このように嫌がつたのは初めてだったが、部屋に入ると「かいもんやろー。」と言って、いつものCに戻つた。

前回のように果物屋さんごっこをした。今回は、Tがお店やさんになつた。Cが買い物に来ようとして「(お店が)やってる?」と聞いてきた。「まだです。」と言うと、また「やってる?」と聞いてきた。「やってるよ。」といううれしそうにかばんを持ってやつてきた。「○○ください。」と言えた。果物の名前は完全に覚えている。野菜の名前は、キャベツ、にんじん、だいこん、かぼちゃがわかる。とうもろこしは、なかなか覚えられないようだ。「また、来て下さい。」と言つたらCは自分がお客様でも「またきてください。」と言う。意味がわかっていないくとも真似して使つている。

今回も朝と夜の場面があつた。Cは「やべー、よる、じかんだ。」と言つて眠るふりをする。起きる時は「もう、あさよ」とか「たいようだー」と言う。

今回は、電話を取り入れた。「これなーに?」と聞くと「おでんわ。」と答えた。電話を通じて会話ができた。「今、何やってたの?」と聞くと「今ねんねしてた」、「(お店は)やってる?」と聞くと「ねてるけどいいよー。」と答えた。

黒板に絵を描いたが、なぐり書きだった。Cは、蛇を描いたらしい。目もなく、どちらが前かもわからない。

途中、忘れ物を取りに別の部屋を行つたTにCがついてきた。その教室には学生が3人いた。学生のほうから「こんにちは。」と言うとCも「こんにちはー。」と言ひ返すことができた。以前は、「おはよう」としか言えなかつた。母親に促されて言うことはあったが、自分から言うことができるようになつた。

今回は、Tが「何円です。」と言うとCは手をたたくことでお金の代わりをした。最初は、Tがお客様のときに「お金です。」と言って手をたたいたのでCはその真似をしたようだ。

第13回 部屋に来るとまず「ごはんたべたよー」、「すしたべたよー」、「ドンキーコング2やつたよ」と話してくれた。その後、「かいもんやろー。」と言つてきた。しかし、すぐには靴を脱がず、ファンヒーターの前に立つてあたつていた。「靴脱いで、ジャンパー脱いで」と言うと、今回、初めて自分で靴をそろえて脱ぐことができた。

お店やさんごっこを前回と同じようにした。今日はずつとCがお客様だった。Cが「ビンボーン」と言いながら訪ねてくる。きちんと出迎えてドアを開けなければ入つてこない。Tが開けるふりをして「○○さんどうしたの?」と聞くとCは「あのー、あそびにきたよ。」と答えた。Cはお客様であるが、帰つて行く時「またきてください。」と言つてゐた。途中からゲームの話になりCが「クッパ」、Tが「マリオ」となつた。Tが「○○くーん」と呼びかけると、「クッパだよ。」と言い直させる。「くっぱー」と呼び直すと「はーい。」と言って返事をした。

絵カードを使用した。食べる、寝る、洗う、切る、泣くのうち幼児語を使ったのは、「寝る」の

「ねんね」だけで「て、あらってる」「えんえん、ないてる」「ちよっくん、かみ、きる」「あむあむ、ごはん、たべる」というように、成人語を使っていたが、助詞ははっきりしない。「パン」のことを「パンパン」、「ぞう」は、「ぞうさん」、「犬」は「子犬」と言っていた。色は、1回目に聞いた時、赤色と黄色がわかつていた。しかし、2回目には、正解だったものが、間違っていたり、わからなかつたものが答えられたりした。りんごの大小を聞いたとき、必ず小さいほうを指すのでふざけているかどうか不明である。

心の理論課題の2回目を行つた。

IV. 治療過程の評価

(1) 経過の要約

—「買い物ごっこ」遊びを中心にして—

Cの遊びの変化がみられたのは「買い物ごっこ」だった。Cの「買い物ごっこ」は第1回～第10回の第Ⅰ期及び第Ⅱ期と第11回～最終までの2つに分けられる。大きな違いは、第Ⅰ期及び第Ⅱ期ではお客様がないことである。「買い物ごっこ」というよりも「おままごと」である。CとTは、おそらく同じ家に住んでいるお母さんと子どものような設定であろう。Cがかごを持って買い物に出かけ、離れたところに置いてある果物を取りに行って帰ってくるという遊び方であった。この頃のことばのやりとりは、「バイバイ」、「買ってくる」、「おかえり」、「買ってきたよー」、「なにほしー？」などであった。

この「買い物ごっこ」に変化が見られたのは、第11回目の紙芝居「くださいな」を見てからである。「お客様」と「お店屋さん」が存在するようになつた。このことからやりとりにも幅が出てきた。「今、何やってたの？」と聞くと「ねんねしてた」と返ってきたり、「今、(お店)やってる？」と聞くと「ねてるけどいいよー」と返ってきたりした。また、Cが「ピンポーン」と言いながら訪ねてきて、ドアを開けるふりをするまで待っていたり、「どうしたの？」というような抽象的な問いかけに対して「スープ作ったよ」と答えられるようになった。

第Ⅰ期及び第Ⅱ期では、Tは「Cの遊びの相手をする」という存在から第Ⅲ期にはTは「Cと一緒に遊んでいる」という存在に変化した。

(2) 心の理論課題

ここでは、Baron-Cohenら(1985)のサリーとアンの課題を第6回目のセッションと3ヵ月後の第13回目のセッションの2回行った。サリーとアンの課題とは次のようなものである。サリーはかご、アンは箱をそれぞれ持っている。サリーはビー玉をかごに片づけて、外に散歩に出掛ける。サリーの外出中に、アンはサリーのかごの中からビー玉を取り出し、自分の箱の中に入れる。サリーが帰ってきてビー玉で遊ぼうと思い、まずどこを探すかを問う課題である。

治療教育活動を始めて2ヶ月時点の3歳6ヶ月では、誤答であった。最初は、人形を怖がって見ようとした。片づけるよー。あーあ、残念」と言うと突然「見るー」と言い出した。アンがかごの中から取り出し、自分の箱の中に入れてしまう時がおもしろいようで、「わーい」と言いながらとても喜んでいた。Cは、箱のほうを指差した。

治療教育活動開始後、5ヶ月後の3歳9ヶ月では正答であった。アンがかごの中から取り出し自分の箱に入れてしまう場面になると喜んで見ている。2回ともかごの方を指差し、さらにアンの方を指差し「これ(こいつ)のせい」と言った。言葉で説明はできないが、どうしてなのかは分かっていた。

(3) 発信行動の分析

治療過程の場面をVTR録画し、TとCの発話と行動を逐次書き出したトランスクriptを作成して後藤(1976)の相互作用の分析を試みた。

言語関係が成立しているA水準と言語関係が無成立のC水準の変化を見る。第1回目のセッションではA水準が22%であったのが、第5回目のセッションには40%に増加した。C水準は46%から29%に減少した。やり取りの方向を見ると第1回目ではTからCが63%，第5回目には56%，CからTへは第1回目には37%，第5回目には44%であった。

言語カテゴリー別に見ると第1回目と第5回目いずれも頻度が高かったのは「応答」であった。第1回目が47%，第5回目が51%であった。これは、CがTからの働きに対して応じているためである。第1回目と第5回目で変化が見られたのは、「報告」であり、13%から24%に変化した。Cの報告の内容は、状況の説明で「○○があったよ。」

表1 言語関係カテゴリー表

言語行動カテゴリ	内容	
	第1回目	第5回目
要求	呼びかけ 提案・誘い 指示・命令	何か食べることによって相手の注意を喚起する。 相手に自分の考えを伝え相手の意見・意志を求める。 指示・命令・注意・要請など相手の特定の行動を求める。
質問	質問	相手に「説明や返事を求める問い合わせ」
報告	報告	提示・報告・主張など自分の考えをありのまま述べる。
教示	教示	相手に新しい知識や情報を与える。
評価	評価	相手の行動、成績に対する正の評価反応 および負の評価反応
応答	反復・模倣 返事 受容・承認 拒否 説明 聞き返し 発声	相手の発話をそのまま繰り返す 相手の質問にYes/Noで応答する。 要求カテゴリーの働きかけに対する肯定的応答 相手の働きかけに対して不賛成や引き受けたくない気持ちを示す 相手の質問に対する説明的応答 相手の質問・報告などをもう一度聞き返す 子どもの Vocalization

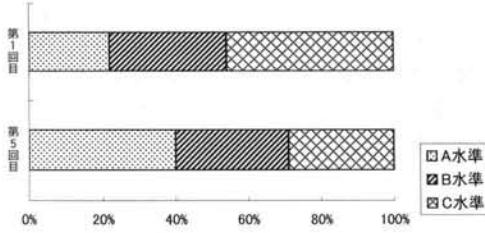


図1 コミュニケーション成立水準

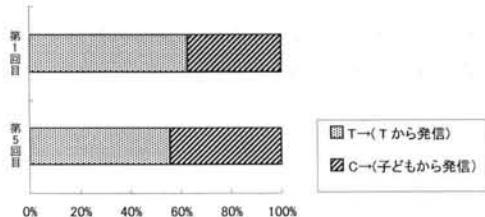


図2 発信開始状況

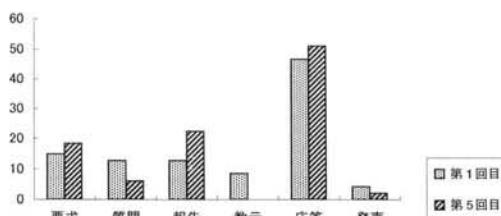


図3 言語関係カテゴリー

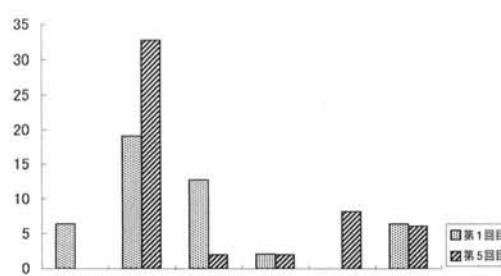


図4 カテゴリー別言語関係(応答)

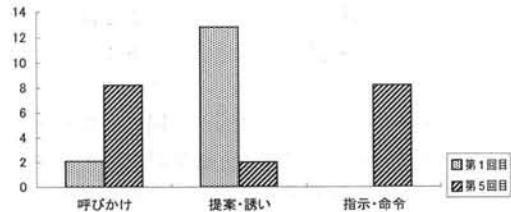


図4 カテゴリー別言語関係(応答)

というものが多かった。内容自体は、それほど濃いものではなかったが、発信の意図にはCのコミュニケーションや対人関係に対する積極的な態度が伺える。「要求」を「呼びかけ」、「提案・誘い」、「指示・命令」に分けて分析した。「呼びかけ」は、第1回目は2%であったが、第5回目には8%に増加した。「提案・誘い」は第1回目では13%であったが、第5回目には2%に減少した。これは、遊びの違いであろう。第1回目は、「御弁当ごっこ」を行い、御弁当を食べる場所を変える時に「提案・誘い」があったためであろう。「指示・命令」は、第1回目には見られなかったが、第5回目には8%となった。これは、Cが遊びの主導権を握るようになってきたためであろう。この「指示・命令」は、「えーん、えーんって言って」、「あんくにもポイって投げて」というようにCの発話の中で長いものになっていた。「応答」は、「反復・模倣」、「返事」、「受容・承認」、「拒否」、「説明」、「聞き返し」に分けて分析した。「返事」は、第1回目が19%、第5回目が33%であった。第5回目はTの働き掛けに対してCの無反応の場面が少なくなったことを示している。「反復・模倣」は、第1回目では見られたが、第5回目は見られなかった。「説明」は、第1回目では見られなかったが、第5回目は見られた。

V. おわりに

治療教育活動を開始した第1回目は、Tの方から話しかけてもCは自分の遊びに夢中になって全く聞こうとしなかった。Cが用事がある時にはTに関わってくるだけであった。その時、声を出して呼ぶのではなく、Tのところまでわざわざやって来て、手を引いていた。Cの発信も音声言語の殆どが「これこれ」であり、指差しで要求を表していた。第13回目の最終回には電話でのやり取りもできるようになった。Tが「どうしたの?」とCに尋ねると「遊びに来たよ」と応えられるよう

になった。この短期間に多くの話しことばが身につき、以前よりも長い文を発信できるようになった。

発信行動の分析では、初回と5回目の比較を試みた。言語関係成立状態のA水準が22%から40%に増加し、言語関係無成立状態のC水準が46%から29%に減少したことに示されるようにやり取りが向上したことが伺える。

心の理論課題は、セッションの第6回目と第13回目に試み、13回目には達成できた。第13回目のセッションあたりでは、T-C関係においてCは他者の意図や行為を理解するような場面も見られた。ただし、心の理論課題の達成要因は明確ではない。一つには年齢要因があげられ、生物学的な要因かもしれない、また、第6回目以降のT-C関係の深まりによって心の理解が促進されたかもしれない。第6回目の言語関係成立水準は、40%前後であったが、このレベルでは、心の理論課題を達成するのは難しいことが推測できるが、第13回目前後の発信行動の分析を行なっていないので断言できない。しかし、やり取りを中心とした遊びを通じ、他者と関わることを積極的に意図した治療教育活動によって他者の意図、思考を理解し、話しことばを獲得していったことは確かであろう。

本児の療育活動の短期的な目標は、入園するまでに対人関係を改善させることにねらいを絞った。行政側の集団療育活動と大学相談室での個別の治療教育活動を併行しているために治療効果とみなせる他者の意図等を理解し、話しことばを獲得していったことは、この両者の活動の総合的な成果によるものであろう。集団療育活動のスーパーバイザーとして関わっている都築は、毎週、Cの行動を観察し、母親にその都度、簡単なアドバイスを行った。そして大学相談室では、週1回、武藤がCの治療教育を、都築が母親面接を併行して行なった。これは、母親の問題意識が極めて低かったことに対する集団療育活動の事例会議の決定によるものである。たとえ短期間でも集中的に本人及び母親に関わることにより入園前の母親の不安をなくすことが支援活動として妥当であるとの判断によった。母親は、周囲の心配をあまり気に留めず、会話のテンポもややゆっくりで控えめであり、母親の個性が滲み出ている。母親面接の最終回では、「これで何とか入園が迎えられます」と涙ぐんでいた。

本事例の場合、集団活動において粗暴な行為が見られたことからその処遇が問題となった。しかし、粗暴さは示さないが、言語発達に遅れが見られ、不器用で、対人関係の取り難い子ども群も見られる。こうした場合、すべての事例に対して今回のように併行して支援活動を行なってはいない。今後とも早期段階における確定診断の問題を考慮しながら言語面に遅れを示す子どもに対する効果的な支援体制を考えていきたい。

付記 本研究の事例においては、子どもの療育を武藤、母親面接を都築が担当し、武藤と都築が共同討議してまとめたものである。故に、本研究は、共同の責任を負うものである。

文 献

- 1) 後藤守 1976 母子言語関係の成立過程に関する研究(1)－ダウン症候群の幼児と母親の言語関係の分析を中心として－ 北海道教育大学紀要（第一部C），26(2), 9-21.